

【平成23年度】

～「水が織りなす安曇野今昔物語」講座～

～豊科編～

第1回



とき：8月5日（金） 午後7時から

演題：【安曇野の民話力 -現代を生きぬく人に-】

講師：長野県立諏訪清陵高校 教諭

細川 恒さん

平成 23 年度 8 月 5 日

『安曇野の民話力 ―現代を生きぬく人に―』

【講師紹介】

細川 恒（ほそかわ ひさし）

- ・長野県立諏訪清陵高校 教諭。
- ・安曇野市穂高生まれ。
- ・松本深志高校、松本美須ヶ丘高校などで国語科を担当。
- ・文学を自分の目で読むことの魅力を紹介し続けてきた。豊科図書館休館イベント「仲間とたのしく読む 賢治・源氏・徒然」を担当。元「安曇野文芸」編集長。
- ・論文に「『八面大王伝説』の新文献」（平成 11 年『信濃』）、「信濃の伝承における『多面』の鬼たち」（平成 14 年『長野県国語国文学会研究紀要』）、「鬼伝説の生成と成長―八面大王伝説を中心に」（平成 15 年『信濃』）など。他に国語教育関係の共著が何冊かある。

いまを生きている私たちをとりまく厳しい現実。不況、少子高齢化、いじめ、そして 3.11 東日本大震災と、不安をかき立てる出来事が身のまわりで続いて起こっています。この息苦しい時代に、私たちは何を「道しるべ」として生きていけばよいのでしょうか？

今回の講座では、この大切な課題について考えるヒントを、私たちの安曇野に語り伝えられてきた民話（伝説を中心に）の中に見つけ出せないか、皆さんといっしょに探してみたいと思います。

実際に皆さんがよく知っている安曇野の民話を読みながら、その民話が生まれてきた背景や意味について考えたり、皆さんがあまりご存じない民話を紹介したりして、楽しく、自由に読み味わいながら、安曇野の先祖たちが残してくれたメッセージにふれることができればと思います。

安曇野の民話から

「重柳のキツネ」（豊科） あらすじ

ある日、一人で田植えをしている喜作のところに、田植えを手伝いたいという「若くて美しい娘」がやってくる。娘はそのまま喜作の家に住みつき、男の子まで生まれて幸せに暮らしていた。ある日、喜作が娘の着物のすそからキツネのしっぽが出ているのを見つけて驚くと、娘は自分がこのあたりに住むキツネであると話し、男の子を託して姿を消す。

その後、残された男の子は立派に育ち、村の用水路を掘る仕事など、この土地に大そう役立った。



貧しい百姓の願望

異類婚姻譚

キツネ（稲荷）信仰 安倍清明

（豊科郷土博物館蔵）

「室山のデーラボッチャ」（三郷） あらすじ

昔、東山の神様に頼まれて西山の土をもっこに入れて東山に運んでいる時、突然鶏が鳴き夜が明けた。あわてたデーラボッチャは最後の一もっこを落としてしまった。その時に出来たのが「室山」である。



天地創造巨人伝説

零落した神（人間くさい神）

（三郷室山アグリパーク）

「常念坊」（堀金） あらすじ

昔、毎年暮れの市になると、一人の山姥が酒を買いに来る。どう見ても五合しか入らない徳利に一升、二升入れてくれというので、酒屋が入れて見ると不思議なことにいくらでも入る。その山姥は常念岳に消えていくことから、人々はその正体が常念坊ではないかと恐れた。それから山姥を見ると人は姿を隠したので、市も次第に寂れてしまった。



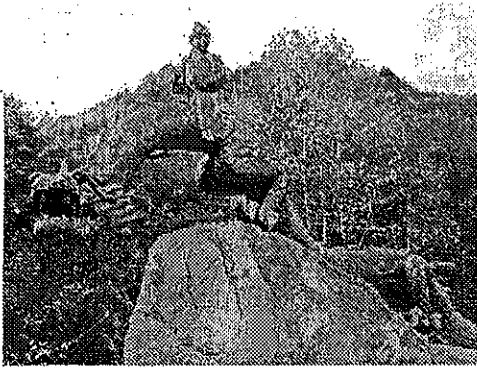
山の民との交流（畏怖心・恐怖）

椀貸伝説

（常念坊の雪形 安曇野市 HP より）

「泉小太郎」（明科ほか、松本平一帯） あらすじ

大昔、松本平は湖だった。この湖に住む白龍と犀龍の子である日光泉小太郎は、尾入沢（豊科）で母の犀龍と会いその背に乗って、山清路や水内の岸壁を突き破り、湖の水を日本海まで流した。その時から松本平は人の住める肥沃な土地となった。



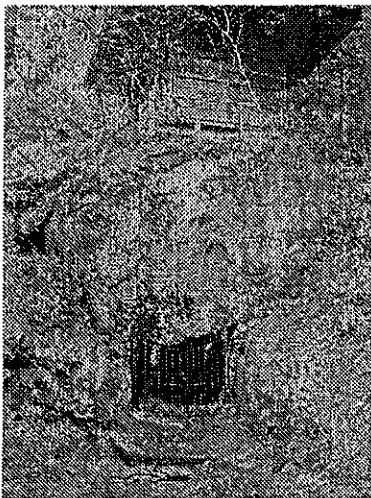
水との戦いの歴史

郷土の開拓神への信仰

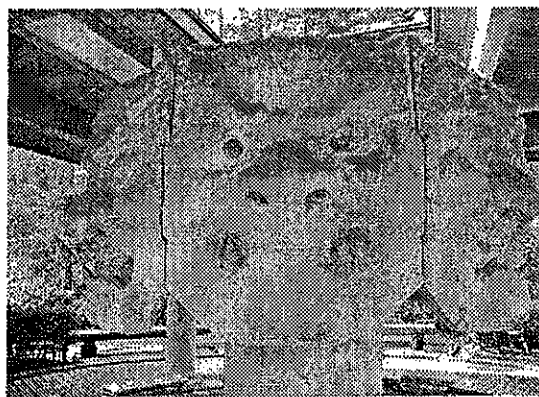
（高瀬川溪谷）

「魏石鬼の窟」（穂高） あらすじ

桓武天皇のころ、穂高の宮城に魏石鬼と呼ばれる鬼神が住んで八面大王と名乗り、人々を苦しめたが、都から討伐にきた坂上田村麻呂によって退治された。この八面大王は一説では安曇野に勢力を持つ土地の英雄であったとも伝えられている。八面大王が住んだといわれる岩窟は今でも残り、横穴式石室であったことが分かっている。岩窟の上には観音堂が建てられている。



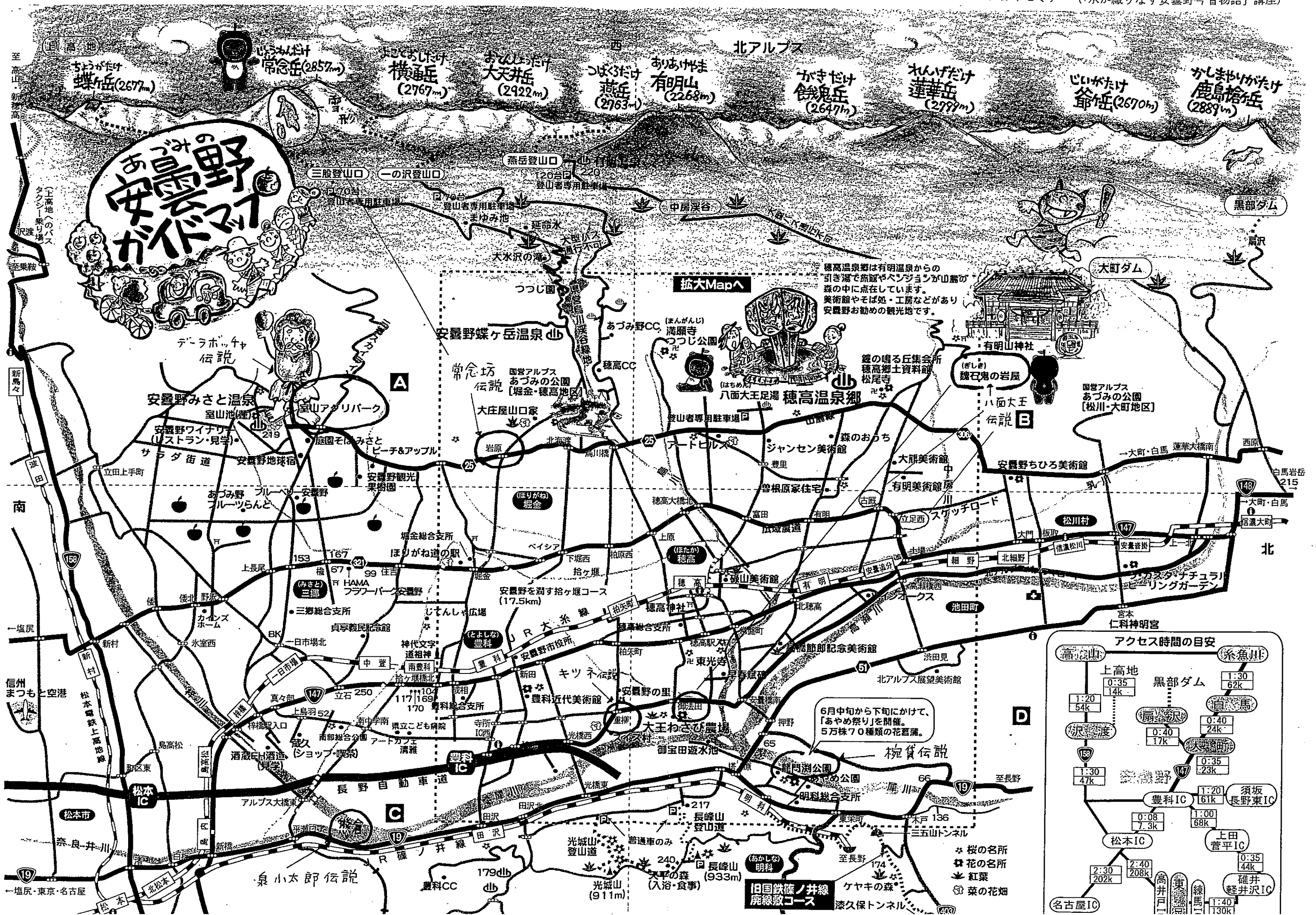
（魏石鬼窟）



（穂高温泉郷 八面大王足湯）

坂上田村麻呂伝説

八面大王伝説にちなむ地名（立足、大王神社、耳塚一穂高 塔の原一明科 首塚一松本筑摩神社
鬼女神社一明科 ネズミ穴一松川 等多数）



「八面大王伝説」の根底にあるものは何か？

1 八面大王伝説を構成する要素

① 坂上田村麻呂伝説 → 東日本に広く分布（征討の史実のないところにも）

② 動物報恩譚 → 初出の『信府統記』（享保9年・1724）にはない
昭和32 『信濃の民話』（松谷みよ子）が再話～

③ 鬼退治伝説

2 坂上田村麻呂伝説の傾向

田村麻呂征討の史実があるところ（岩手など） → 「寺社建立話」が多い
ないところ（秋田など） → 「征討話」（鬼退治の話）が多い

・長野県には約70の田村麻呂伝承地がある

その中でも代表的な「八面大王伝説」伝承地には「征討話」が多く残る

↓

→ 史実の反映ではないのでは？

「八面大王伝説」の最も古い形は「鬼退治」の話と考えてよい

3 長野県に残る田村麻呂等による鬼退治伝説の例

角間溪谷の毘耶王退治（真田町） 清水観音に祈願して退治

高社山の大蛇退治（下高井） 山岳信仰（天台系）

〈鬼女紅葉伝説＝平惟茂が退治〉（戸隠） 北向山観音に祈願

鬼の棲む山に共通する点

1 地域において特別視される山容の美しい神体山である

2 その山は地域の農耕と深く関わる「水分の山」としての役割

3 天台・真言の修験者が入り込んだ山である

4 観音信仰が周辺地域に定着していた

5 霊泉伝承や竜蛇の伝承が残されている

4 『信府統記』における「八面大王伝説」の位置付け

天の岩戸が落ちた有明山の話 － 泉小太郎伝説 － 八面大王伝説 の順
（安曇野の創世神話）

5 鬼の造形 → 多面が一般的

九頭龍（戸隠山） 紅葉狩の三面の悪鬼（戸隠山） 八頭一身の大鹿（丹波）

九足八面の鬼王官那羅（諏訪） 両面宿儺（飛騨） 〈十一面観音 法隆寺観音菩薩＝九面〉

5 「八面大王伝説」の持つ性格

地域の人々の信仰の対象であり、水分の山として農耕生活とも深く結びつく有明山を舞台に、この山に入り込んだ修験者たちによって、観音霊験譚として作られた鬼伝説ではないか。この鬼の形が「八面」とであるというのも、地付きの鬼の典型的なパターンである（八俣大蛇の伝説など）。

この鬼伝説の背景には、有明山から流れ出す河川が時として氾濫や渇水で地域住民を苦しめた記憶が反映しているのではないか。その意味では、八面大王伝説も人と水との歴史を物語る話の一つ。

本日見てきた伝説はいずれも、「水が織りなす安曇野」の成長の物語と言える。